

## 南支那

### 夏兵潮州城奪回

佐賀県 丸山菊夫

私は、大正十一年九月に鹿児島県で生まれた昭和十七年徴集兵であり、昭和十六年三月に現地入隊した部隊は、広東に軍司令部を置く第二十三軍隷下の独立混成第十九旅団（潮兵団）であった。その編成は、独立歩兵第九十七大隊から第一百一大隊の歩兵を基幹とする五個大隊と、砲兵隊、工兵隊、輜重兵隊、それに野戦病院が配属された約八千人の兵力を擁する兵団であった。

入隊後、選ばれて広東に派遣され、軍司令部の下士官候補者隊で現役下士官としての厳しい教育を受け、任官帰隊後は、同じ兵団の独立歩兵第九大隊に配属となった。

我が潮兵団（後に第一三〇師団・鐘馗兵団）は、南

支那の海岸にある汕頭、潮陽、潮州などと、その周辺の警備を担当していたが、この一帯は所謂「援蔣ルート」の基点で、軍需品などを支那軍に送るアメリカなど連合国側の補給路（支援のルート）となっていた。そのため、これを封鎖遮断することを主目的とした戦闘が度々行われていたのである。

日支事変は、昭和十三年十月、日本軍がバイヤス湾に奇襲上陸し、広東を占領、その周辺の要地を攻略するなど、日本軍の力は支那軍よりはるかに優勢であった。しかし、大戦の後半に至るにつれ連合軍が優勢となり、攻守所を替え、とくに南方戦線の拡大により、支那大陸の作戦は現勢力維持のまま据え置かれ、補給も滞り、逆に援蔣ルートでの蒋介石軍に対する支援は活発となり、また、中国軍の装備は、連合国の積極的な援助により従来とは異なって近代化されてきたのである。

私は、潮兵団に入隊以来、すなわち昭和十八年六月から半年にわたり、南支広東省潮州の山野に展開された潮州争奪戦に参加した。その凄絶悲惨を極めた体験

を記述したい。

この戦いにおいて日中両陣営は多大な損害を招き、この戦闘で敵は日本軍兵士を捕虜にして戦わせるなど悪辣非道な手段をとり、これを攻撃する我が部隊は、止むなくこれらと戦わざるを得なくなった。

私は、この戦闘で負傷し、その弾痕は未摘出のまま体内に残置し、その後遺症に苦しみながら五十余年前の衝撃的な状況が思い出され、戦慄を覚えるのである。これまで、関係兵士達の心情を思いひたすら沈黙してきたが、既に七十歳を超える高齢となり、余命も短くなったので、これでは心もとない、せめて生あるうちに、後世に語り継ぐことこそ戦争体験者の責務だと思いい、当時の実相を記述するものである。

### 第一次潮州争奪戦

昭和十七年頃までは、比較的安定していた潮汕地区の戦況も、西太平洋方面で日本軍の不利が伝えられるようになってから、支那大陸における重慶軍の攻勢が活発化してきた。とくに潮州前面蔣介石軍隷下の、第百八十六師団、独立第二十旅団、艇身縦隊、潮安国民

兵団、保安第二団など数方の兵力が、わが独立歩兵第九十七大隊を攻撃した。潮兵団麾下の各大隊は、総力を挙げて支援することになり、兵団司令部直轄の我が原口隊は、必要兵力を残置し、六月十四日、先遣隊として急遽出動した。中隊長原口中尉は出張中のため、谷口中尉が指揮を執り、私は指揮班長として参加した。

戦闘の場所は潮汕公路沿いの、西方に二キロの羊鉄嶺、蟹目山などの連峰がひしめく山岳地帯である。我が谷口隊は、戦略拠点確保のため、蟹目山を占領し、敵と対面した東斜面コブ状台地に重機関銃を配置し、敵の逆襲に対処しながら、直ちに陣地構築に着手した。敵は失った蟹目山を奪回すべく迫撃砲支援のもと執拗な反撃は熾烈を極め、山林を吹き飛ばし、岩肌をも焦がす凄まじさである。連日激しく降る雨に、身を遮蔽するものはなく、ズブ濡れとなり体に染み込んでくる。着替えもなく体熱で乾かす以外方法はない。

山が高く中腹までは厚い雲が蔽い、視界が狭く、肌寒い。地層が堅く、円匙えびやつるはして掘り起こすのに難儀する。せっかく掘り進んだ塹壕や蛸壺には、水が

溜まり泥沼状態となり、ますます作業を困難にする。

間断無く炸裂する砲弾に「やられた！」という悲痛な叫び声上がる。こんな凄惨な場面に遭遇すると、目の前の敵より、飛んでくる砲弾の方がずっと怖い。

不眠不休の作業は雨が災いして、もう二日間何も食べていない。飯盒炊さんするにも、マッチは濡れ燃料もない。非常食の乾パンは水分を含み青かびが生え、食用にはならない。ほかに食うものがないから、有害だと解ついても仕方なく食べてしまう。すると間もなく猛烈な腹痛と下痢に襲われる。この繰り返しだから、体力の低下は免れず、栄養不足からくる脚気や胸部疾患で、作業班から脱落してゆく。残った者は敵情偵察の斥候、陣地内の警備と、その勤務は過重になってくる。

このような過酷な勤務に耐え切れず敵前逃亡、自殺、発狂者まで出てくる始末である。病弱者は病院送りすべきだが、周囲は敵に包囲されているため、地面に寝かされ、ウンウン唸っている。人間の限界を超えた過酷な状況の下で、もはや戦う余力も失いかげようとし

ている夜明け前、降雨の激しさに加え、敵の重砲撃が熾烈となり、無防備に等しい陣地の後方から敵の大部隊が攻撃してきた。

私はすばやく銃を執り、手榴弾を投げ入れ、「陣地後方より敵襲、配置につけ」と命令した。敵は地形を熟知しているため敢えて正面を避け後方から侵入してきたのである。急報により駆けつけた谷口隊長は、勇敢に軍刀をかざして斬り込んだが、間もなく敵弾に斃れた。敵はやられてもやられても、おじまず人海戦術で攻めてくる。両軍入り乱れての白兵戦で、敵は多数の死体を遺棄して退去を始めた。

これを麓まで追跡し、後陣地に戻ると、戦死した谷口隊長の軍刀には敵兵の血痕がつき、左手は陣地の土を掴み、俯せになっている姿は彼の無念さを忍ばせた。この戦闘で我が隊は、出動兵力の半数を失い、軍人の魂である重機関銃などを敵に奪われ、事実上敗戦に終わった。

戦線の膠着に伴い戦闘態勢を解き、救援部隊は原隊復帰したが、敵はしばらくしてまた攻勢に転じ、この

作戦は終息していないことを認識した。戦死者の遺体は、トラックで汕頭市、外馬路第一中学校跡の駐屯地に運び、宮庭数カ所に壕を掘り、数日かかって火葬にしたが、立ちこめる煙を見て、やるせない気持ちと、戦争の罪悪感が胸を衝いた。

出張先より帰任した原隊長は、この無念を晴らすべく、中隊独自で弔い合戦を実施しようとしたが、兵団長はいずれその時が来るから自重せよと慰留し、これを思いとどまらせた。その後中隊長の人事交流があり、新しく赴任してきた本田義弘中尉は、隊内に厭戦（戦争恐怖症）思想があることを懸念し、精神教育を徹底し強化した。

### 第二次潮州争奪戦

第一次潮州争奪戦後、一カ月も経たないうちに、揭陽に集結した敵第九十六師団、第百八十六師団及び第二十旅団の各部隊が、再び我が潮州前面に、組織的反抗を開始し、小松大佐率いる我が第九十七大隊は勇戦敢闘及ばず、主要陣地は悉く敵に奪われ、県都潮州は陥落寸前の状態にあった。

この潮州は昭和十四年占領後は、我が兵団によって完全確保してきたが、戦局の推移に伴い兵力を削減され、現在は要所のみを占領に変わり、周囲は蔣介石隷下の軍隊によって占領され、しばしば攻撃を受け、わが軍は損害を受けていた。

潮陽のわが独立歩兵第百隊に潮州奪還の命令が下ったのは九月十日の正午過ぎであった。直ちに戦線を撤去し移動を開始した。しかしこの兵団長の決意にはいささか理解し難い点があった。潮州は戦略上の重要性に鑑み、いつも二個大隊が常駐し揺るぎない態勢にありながら、なぜ海を隔て、遠隔地にあるわが部隊にこれを行わせようとするのか、その意図を計りかねていたが、他説によれば、兵団長と陸士の同期のわが部隊長が自ら申し出て、兵団存亡の危機を救おうという、厚き友情に基づくものであることが判った。もし潮州奪還叶わざれば、昭和十四年に編成され、遠藤春山、松井貫一、中村次喜藏と三代続いた兵団長の輝かしい歴史も消滅しかねない重大な岐路にあることを思えば、奮起せねばならない。

經由地の汕頭は、潮州の戦火を逃れてきた避難民の群れで混乱している。南国特有の酷暑と戦いながら、潮州公路を進むと、汕頭攻略を目指す敵別動隊と遭遇したが、これを撃退してようやく最前線基地に着いた。もう辺りは真つ暗である。戦闘服に身を固めた兵団長は、これから壮途に着くわが部隊將兵に対し「決死潮州を奪還せよ。然らざれば生還許さず」と極めて短い非情な命令を下した。私は第一小隊第一分隊長に編成された。いよいよ行動開始である。

重い砲身や弾薬を背負った軍馬と、重い装備に銃を担いだ我々歩兵部隊も、軍用犬を連れての出発である。我々の出撃を見送った兵団長はその場を去らず、戦況を見詰め、もし攻撃に失敗したら白決する覚悟だったという。しばらく進むと道路は寸断している。敵が日本軍の進撃を阻止するための対戦車壕である。橋は悉く爆破されている。敵に占領された厚姿拗陣地までは、水田の畦道やクリークの泥沼地帯を遅々と歩かねばならない。

右翼方面の友軍は敵に接触したらしく、鋭い銃声が

闇を貫いて聞こえてくる。夜間といえども高い姿勢では拙い。尺取虫のような匍匐前進である。敵が打ち上げる照明弾は、真昼のような明るさとなり、匍匐前進する我々の背中を照らし銃火の目標となり、方々で「やられた」という悲痛な叫び声があると、その方向へ射撃が集中する。

敵の背後を衝く奇襲渡河作戦は、敵の十字砲火を浴び、失敗して終わった。われわれは水田に這ったまま、進撃命令を待っていた。水浸しのため体が震えて止まらない。待望の友軍の砲撃が始まり、この援護によって陣地の麓まで進出した。

敵は米軍式装備を強化した精鋭部隊、しかも峻険たる山岳戦である。敵陣は鉄条網を幾重にも張り、多数の地雷を埋設している。友軍の砲兵陣地は、敵の直撃砲弾を受け、木端微塵となり、一方的に飛んでくる敵の砲弾は的確に目標に命中し、耳鳴りが止まらない状態である。繰り返し行う突撃は、障害物と敵陣に阻まれ死体だけが山のように重なっている。敵には地の利があり、戦況を有利に展開している。

一進一退の状況を逆転すべく中隊長は、私に「単身で敵情を搜索して来い」と命令した。私は危険を冒して敵陣深く潜入し、つぶさに陣地内を見詰めると、凄まじく展開する戦況の中で、信じ難い異変を目撃した。敵に捕らえられている日本軍兵士たち数人、脱走防止のため陣地の杭木に縛りつけられ、背後から銃剣を突き付けられ、威嚇されて味方である我々に狂気の如く乱射しているのである。これを無情にも中秋の月が照らしている。

斥候任務を終え報告すると、上層部はいかにも当惑顔であった。厚姿掘陣地は日本軍が技術の粋により完成した自慢のもので、これを陥落するのは容易なことではない。軍の上層部は攻撃しさえすれば必ず勝つと信じているようであった。参謀が地図の上でわずかにセンチか二センチの赤線を引き作戦を計画するだけで、我々最前線の将兵は五日も六日も汗を流し、足を引きずり体力を消耗し、このように敵の抵抗を受ければ血を流し戦死者を出すのである。最前線は連日の激戦で損耗著しく、生き残った将兵は疲労困憊その極みに達

した。

#### 兵団長陣頭指揮

戦況が一向に好転しないため、兵団長は空軍機の出動を要請し、機上から指揮を執り、我が部隊に対し「友軍機の爆撃に呼応して、敵陣に突撃せよ」という命令であった。今までの戦闘は夜間に限られていたが、今度は真昼の戦闘である。兵隊たちは、何だか勝手が違って戸惑う気持ちであるが、友軍機の援護下とあって、小躍りして喜ぶ者が多かった。数機編隊の友軍機は、一機ずつ急降下し、敵陣に銃撃掃射して、小型爆弾を投下した。これにはいかに堅固な敵陣もたまらない。はじめは機関銃などで応戦したが、遂には沈黙してしまった。わが部隊は、空陸打ち合わせ通り敵陣に突入した。銃爆撃に叩かれた敵は、一部では激しく抵抗したが、浮き足だっって、おびただしい屍体を残して敗走を始めた。

難攻不落といわれた厚姿掘陣地は、悪戦苦闘の末、友軍機の協力もあって、ようやく奪取することが出来た。だが、そう思ったのもつかの間、地上軍と友軍機

の連絡不徹底で敵陣地を占領した我々に対し、友軍機は銃爆撃を繰り返すのである。これによってたちまち死傷者が出た。慌てて日の丸の旗を振って合図するが友軍機には見えないらしく、攻撃の手を緩めない。こんな事があったとまるかと口惜しいながら、このままでは殺されるから爆撃を逃れようとして這い回っている。やがて友軍機も気がついたらしく、旋回していた一機が、機首を傾けて急降下し、何物かを投下して舞い上がった。

やれやれと、ほっとしたものの、まだ周辺には敵兵がいるので、お互い顔を見あわせるだけで、これを取りに行く者がいない。そこで私が姿勢を低くしてこれを拾ってきた。それは通信筒であり、中から出てきた通信紙には「誤爆遺憾の極み死傷なきや」と鉛筆で書いてある。私がこれを届けると、中隊長は「これは兵団長閣下の直筆だ」と呟いた。

捕虜になっていた日本軍兵士

戦場は敵味方入り乱れておびただしい戦死傷者で、足の踏み場もない惨状である。この陣地を占領すると

き、敵が生け捕りにした日本軍兵士数人が猿轡を噛まされたり、後ろ手に縛られ、鉄の足枷が食い込み出血したままの状態で救出された。捕らわれてから水も食物も与えられず栄養失調となり、痩せ細り、衰弱が激しく口もきけない、半死半生の姿は哀れであった。

これらの兵士に水を飲ませたり、煙草を与えたりするが首を垂れ、吸う気力は無かった。私は隊員にいつも「敵の捕虜には個人的に敵対視するな、勇敢に戦いながら武運拙く捕虜になった者を敬う心を持って」と教えてきたが、この敵側の国際ルールを無視した蛮行には、激しい怒りを抑えることは出来なかった。

戦傷を受けて野戦病院へ

私はこの戦場で、敵弾が右足を貫通し、左大腿部は砲弾破片を受け、左胸部肋骨部を損傷し、出血多量で汕頭の陸軍病院に搬送された。その時は、水が飲みたい、このくらいで死んでたまるかと思った。病院では次々と送り込まれる負傷兵で溢れ、血なま臭い匂いと、苦痛の呻き声が乱れ飛んだ。素っ裸で、衛生兵三人に抑えつけられ、手術は医薬品不足のため、麻酔薬を使

わず行われた。先の曲がった鉗子を傷口深く挿入し、弾痕を抉り出す荒治療は、気も狂わんばかりの衝撃が走り、まるで生き地獄を見るようだ。軍医は摘出した弾を卓上に並べ、看護婦に数えさせながら、いまだ数個残っているがこれは又線撮影の上再手術するといい、術中の出血の輸血が行われた。私は入院せよという軍医の制止を振り払って、僚友に支えられて戦列に復帰した。

これから実施される風地山、磨石山の戦闘に参加し、完全制圧しない限り生きることが許されない決死隊員だからである。

作戦を終えて

人間の限界を超えた潮州奪回作戦はようやく終了した。兵団長は我が部隊並びに配属隊に対し、その武功を讃え、これを表彰した。しかし、それにしてもその代償はあまりにも大きく、これら戦死者の遺体を茶毘に付し、生木と共に高く上がる煙を見て、この次は俺が焼かれる番ではないか、という悲壮感が漂った。

心の傷はまだ癒えず

私は九州山脈背振山系の麓の村里に、小さな家を建て、余生を暮らしている。だが朝夕目前に見るこれらの山々が、南支潮州の羊鉄嶺などの山に見え、いまだ戦争の悪夢と恐怖に脅えている。現在のわが国は、五十年前の戦争で「平和の礎」となられた人々の尊い犠牲の上に平和が築かれている。その御霊に祈りを捧げ、永遠なる平和を願っている。

私は五十年前の傷痍がまだ癒えず「戦傷病者特別援護法」の通用により治療継続中である。これが癒えない限り私の心の傷は根治出来ない。

### 【解説】

—南支方面の彼我の情況—

昭和十二年十月十三日、白耶土湾上陸、二十一日広東を攻略した時の日本陸軍の兵力は、第二十一軍（第五、第十八、第百四師団主力）と第四飛行団を基幹とするものであった。

これに対し中国軍は、余漢將軍指揮の第四戦区で、



兵力は正規軍一三二師等の約十一万。広東付近に重点を置き（正規軍約八個師、二個旅、民団軍二個師）、各一部をもって福建省（約五個師）、広西省南西沿岸（広西民団軍五個師）を守備、広西軍主力はほとんど全部北上していた。

広東攻略作戦は、海外補給路（援蔣ルート）を他の仏印公路、ビルマ公路、西北輸送路等によらなければならぬため、蔣介石総統は季濟探將軍を第四戦区長官、張發奎將軍を南支防衛司令に任じたが、わが軍は十一月初頭には広東付近の要城を占領した。このため蔣軍は第四戦区の中心を広西省に移し張發奎將軍を戦区長官とし、広東北方韶関（曲江）附近を中心とする前敵総司令に余漢謀將軍を任命した。

この攻略戦と漢口攻略戦は相俟って爾後の中国の政略両面に及ぼす影響は大で、蔣政権は奥地への撤退を余儀なくされた。

その後、昭和十四年二月、海南島（海軍）、六月、汕頭を攻略し、十月さらに南寧—龍州道の遮断を命じた。九月、支那派遣軍が設立され第二十一軍はその隷

下に入った。そしてその基本任務は次のようである。

「広東付近、汕頭付近ニ北部海南島ノ要域ヲ占領シ南方補給ノ遮断ニ任スベシ」

広東付近ノ作戦地域ハ概ネ惠州、従化、清遠、北江及三水ヨリ下流西江ノ間トシ前記場所ノ地域ヲ越エテ行ウ地上作戦ハ別命ニヨル」

即ち、彼我兵力を勘案したり、戦線拡大に対し強く釘を挿している。

南支各地の攻略の地名、時期は次のようである。

「広東及周辺（一三・一二）、海南島（一四・二）、汕頭（一四・六）、北海、欽県（一四・七）、南寧（一四・一二）、来陽北上（一五・一）、龍州（一五・六）、北部仏印越境（一五・九）、仏印海防（一五・九）、陽江（一六・二）、電白、電州、单水口（一六・三）、台山（一六・四）、海豊、陸豊（一六・三、四）、甲子（一六・五）」

南寧作戦では第五師団の二個連隊は優勢な重慶軍の包囲を受け崑崙関守備隊は全滅し、歩兵第二十一旅団長中村少将は戦死する等があり、第二十一軍主力で重

慶軍を撃破し、昭和十五年二月作戦を終了した。

その後、仏印進駐のため第五師団、近衛第一旅団を、昭和十六年十二月、香港攻略のため第三十八師団を、馬來作戦のため第十八師団、ニューギニア作戦に第十一師団が転用され、第二十一軍↓第二十五軍↓第二十三軍の兵力は減少していった。しかし、南支中国軍の広西（桂林行営主任白崇禧）軍の兵力は計二十五個師団、一五四、六〇〇人（国民政府刊行「南寧戦抗戦簡史」）と記されている。

さらに比島バタアン半島攻略に第一砲兵司令部、砲兵情報第五連隊他も転用され、これに米空軍の来襲も頻度を増すに至り、航空兵力の均衡は急激に変化していった。

このような情勢のもと第二十三軍の占拠する広東一帯の地域は東西ほぼ一〇〇キロ、南北ほぼ八〇キロ、珠江と東江にまたがり面積おおむね七、四九〇平方キロ人口約九〇〇万人、人口密度は平方キロ当たり一、二〇〇である。広東は孫文の民族革命発祥地であり、大東亜戦後香港等の外国勢力の一掃が華南何時隊に好

影響を及ぼし治安は概ね確保していた。

昭和十八年、第二十三軍の広東付近の部隊主力は第百四師団、独立混成第二十二旅団で、汕頭地域では独立混成第十九旅団、電州半島では独立混成第二十三旅団を基幹としていた。

同年末の隷下部隊は次のようである。

「電信第十四連隊、自動車第三十九連隊、独立輜重兵第十九・第二十・第二十一中隊、師団第二架橋材料中隊、南支派遣憲兵隊、第六師団第六陸上輸送隊、第八師団第八陸上輸送隊、第七師団第一・第二水上輸送隊、第十二師団第一建築輸送隊、第十四師団第一建築輸送隊、南支那陸軍病院、第七患者輸送部、南支那防疫給水部、第二十三軍病馬廠、南支那軍馬防疫廠、同野戦兵器廠、同自動車廠、同貨物廠」

体験記執筆者・丸山菊夫氏所属の独立混成第十九旅団（潮兵団）の態勢は次のようである。

旅団は昭和十五年十二月編成以来、汕頭地区において同地区の警備に任じていた。ただ独立歩兵第九十八

大隊のみは広東地区にあった第百四師団の指揮に入り、石龍東方地区の警備に任じていた。旅団編成は独立歩兵第九十七・第九十八・第九十九・第百大隊、旅団砲兵、工兵、輜重兵隊からなり、各歩兵大隊は人員八五一人、馬四四〇頭、さらに一九・二・二五の「大陸命第九四六号」により、独立歩兵第百一大隊を臨時編成して強化された。

このように一個師団、三個独立混成旅団という劣勢の日本軍は対峙する中国軍一五個師に攻められては、分散する占領地を確保することは困難である。従って攻められないようにすることで精いっぱいという情況である。

体験記にある如く、昭和十八年六月からの半年間の苦闘に対し、他兵団から援助を求めることはできない。また、汕頭地区には潮兵団所属は四個大隊である。中・北支と異なり、孤立した南支軍は包囲されれば玉碎の他ないのである。

解説者も第二十三軍の独立大隊に勤務したので、兵団長機上指揮により歩飛連合の実を挙げ、見事潮州奪

回の武勲に心から敬意を表したい。

湘桂作戦中、西方で孤立奮闘した独立混成第二十三旅団配属の独立歩兵第七大隊は、小拠点を優勢な敵に包囲されつつ玉碎を免れ任務を完了している。南支各隊は常にこの様な危険を排しつつ陣地を死守していたのである。

## 私の大陸戦記

### 湘桂反転作戦

東京都 宮嶋政久

私は南支第二十三軍、独立混成第二十二旅団、独立歩兵第一二五大隊第四中隊の一員として、昭和十九年六月、大陸打通の湘桂作戦に参戦し、在支米軍航空基地を攻略し、中国大陸と仏領印度支那を打通するといふ建軍以来の大作線に参加、数々の苦痛と多くの先輩、同輩、後輩を大陸の戦野に埋めながらも帰還することが出来ました。